氏名（本籍）	須賀朋子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第　7190　号
学位授与年月	平成　27　年　2　月　28　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中学生へのドメスティック・バイオレンス予防啓発に関する研究
主査	筑波大学教授　教育学博士　徳田克己
副査	筑波大学准教授　博士（文学）　岡本智周
副査	筑波大学准教授　博士（医学）　森田展彰
副査	筑波大学准教授　博士（医学）　笹原信一朗

論文の内容の要旨

（目的）

ドメスティック・バイオレンス(以下、DV)は「配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振るわれる暴力」と内閣府は定義し、日本でも社会問題となっている。海外の研究を参考にしてDV 被害者、DV 家庭で暮らしている子ども、DV 加害者の研究が日本でもはじまっている。今日においては、国内外で若者層の DV が問題となっており、日本ではデート DV と呼んでいる。海外では 1997 年以降に中学生、高校生の DV 予防プログラムの研究が始まっていることから、本研究では、これらの研究を参考して日本版の DV 予防啓発プログラムを作成し、プログラムの効果を検証することとした。DV 予防啓発を日本の中学生・高校生に行うためには、適した時期の検討から始めることが必要であると考え、中学生・高校生の DV の知識と考え方の実態の調査を試みた。また中学生・高校生に DV 予防啓発を行うには現場の教員の DV の認識と予防に対する理解が不可欠と考え、教員の DV についての認識の調査を行うこととした。その後、日本の中学生向けの DV 予防啓発プログラムを作成し、中学生に介入授業を行い、効果の検証とプログラム受講後の主観的な意見から評価を明らかにすることとした。上記の研究を行うことにより、DV を防ぐためには中学生という時期から DV 予防啓発を行うことが必要かつ、有効であることを明らかにすることを目的とした。

（結果）

本論文は 10 章から構成される。第 1 章では本研究における問題の所在を明確にするため、国内外における DV とデート DV の意味の説明と調査の動向を概観した。第 2 章では DV、デート DV、予防プログラムの国内外の研究動向を概観し、第 3 章で研究の目的を明らかにした。

第 4 章では中学生・高校生に DV の知識と DV につながる考え方の質問紙調査を中学 1 年生 116 名、中学 2 年生 118 名、中学 3 年生 111 名、高校 1 年生 77 名、高校 2 年生 72 名、総計 494 名に行った。その結果、知識においては学年による差がみられ、中学 1 年生と 2 年生は知識が一定せず、中学 3 年生以降になると一定になることが明らかとなった。「DV につながる考え方」の因子分析から得られた、支配性を持った「関係性」と、脅威を与えるような「威圧行為」因子において、学年差はみられなかったが男女による差がみられた。

第 5 章では教員(小学校、中学校、高校、特別支援学校)244 名を対象として DV 予防に関する質問紙調査を行った結果、「DV 予防の授業を中学や高校の授業のなかで実施した方がよい」と思っている教員が約 9 割であることが明らかとなった。これらの結果から教員の DV 予防についての関心の高さが考えられた。

第 6 章では「お互いを尊重し合うプログラム　人間関係を大切にするために-Domestic Violence を知る - 」を開発し、中学生 345 名に介入授業を行った。プログラム前、プログラム後、1 か月後の「関係性」、「威圧行為」における変化の検証を行ったところ、男子にも女子にもプログラム効果が 1 か月後も継続していることが確かめられた。

第 7 章では DV 予防プログラムの受講後の主観的な意見の回答を中学生に求めた。プログラム後は 95.6%が肯定的に捉え、1 か月後も 88.8%の生徒が「プログラムが良い影響を与えている」と肯定的な意見であった。

第 8 章では総括として、総合考察、第 9 章で研究の限界と課題、第 10 章の結論では中学生に DV 予防啓発を行うことは、支配を伴った「関係性」や、脅威を与えるような「威圧行為」に気づくことに効果があることをまとめた。

（考察）

DV、デート DV が若い世代の間でも問題化していることから、予防の観点ではどの年代で DV 予防啓発を取り入れていくと効果があるかの検証を試みた。中学生、高校生に DV の知識と考え方の質問紙調査を行い、その結果から中学生という年代が予防の観点では適している年代であろうと焦点を絞ってプログラム介入を行った。1 回のプログラムで中学生は関係性、威圧行為の側面の認識において効果があらわれた。また中学生の 95.6%が「DV の授業は将来、役に立つと思う」と主観的にも興味を示した中学生が多いことが示された。教育現場で DV 予防をとりおこなう教員の意見が大切と考え、DV 予防啓発への意見の回答を求めたところ、9 割弱の教員が中学生や高校生に DV 予防啓発を実施したほうが良いと回答をした。しかし現実はかなりハードルが高いと思われる。こうしたプログラムを学校現場に導入するには教員を対象とした DV 予防の研修や、教材を提供する必要があるだろう。またカリキュラムのなかの位置づけや、他の教科(保健、社会、道徳、特別活動など)との連動も考える必要があるだろう。DV 予防啓発プログラムを受けることにより家庭内で DV がおこっている生徒であれば精神的な苦痛を伴う反応がおこりかねないため、学校内であればスクールカウンセラーなどと教員が連携をとり、生徒の変化に気づいたら対応をしていく環境を整えていきたい。

本研究の対象校の中学生はプログラムに対する満足度は高く、1 か月後も「電車のなかのつり革の DV の記事が目に入るようになった」などの具体的な意見が寄せられた。このような意見と効果の結果から、中学生に DV 予防啓発を行うことは自身や周囲を守る意味でも意義があると思われる。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は、交際相手に対する暴力（以下デート DV）に対する中高生や教師の意識を調べた上で、その予防教育のプログラムを作成し、中学生に実際に用いて有効性に関する検証を行ったものである。現在、ドメステイックバイオレンス（DV）が多く報告され、その対策は急務であり、これを予防する手法の開発には大きな意義があるといえる。

本研究では、中学高校生における DV に関する知識と認識の両面から評価し、高校生は成人とあまり変わらない知識をもっているが、中学生では十分な知識を持っていないことなどを確認している。こうした実態を明らかにしたこともこの研究の成果である。さらに、この知見をもとに中学生にターゲットを絞り、その知識や認識を変えるためのプログラムを作成し、プログラムの前後での暴力への正しい認知を示す尺度の得点の有意な上昇を確認している。海外ではいくつかの有効性のエビデンスをもつプログラムは作成されているが、日本ではそうしたプログラムがなかったのでその点もオリジナルな価値をもつ研究といえる。さらにこうした試みを導入する上で、これを担う教員の意識を調べたところ、導入に肯定的な意見を持つことが確かめられている。つまり、DV 予防教育について教師はその必要性を感じながらもできてこなかったといえ、今回開発したプログラムを提供できれば、学校現場に取り入れられていく可能性があり、そうした示唆を得られたことは本論文の大きな成果といえるだろう。

以上、研究の意義、オリジナリティ、成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 26 年 12 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。